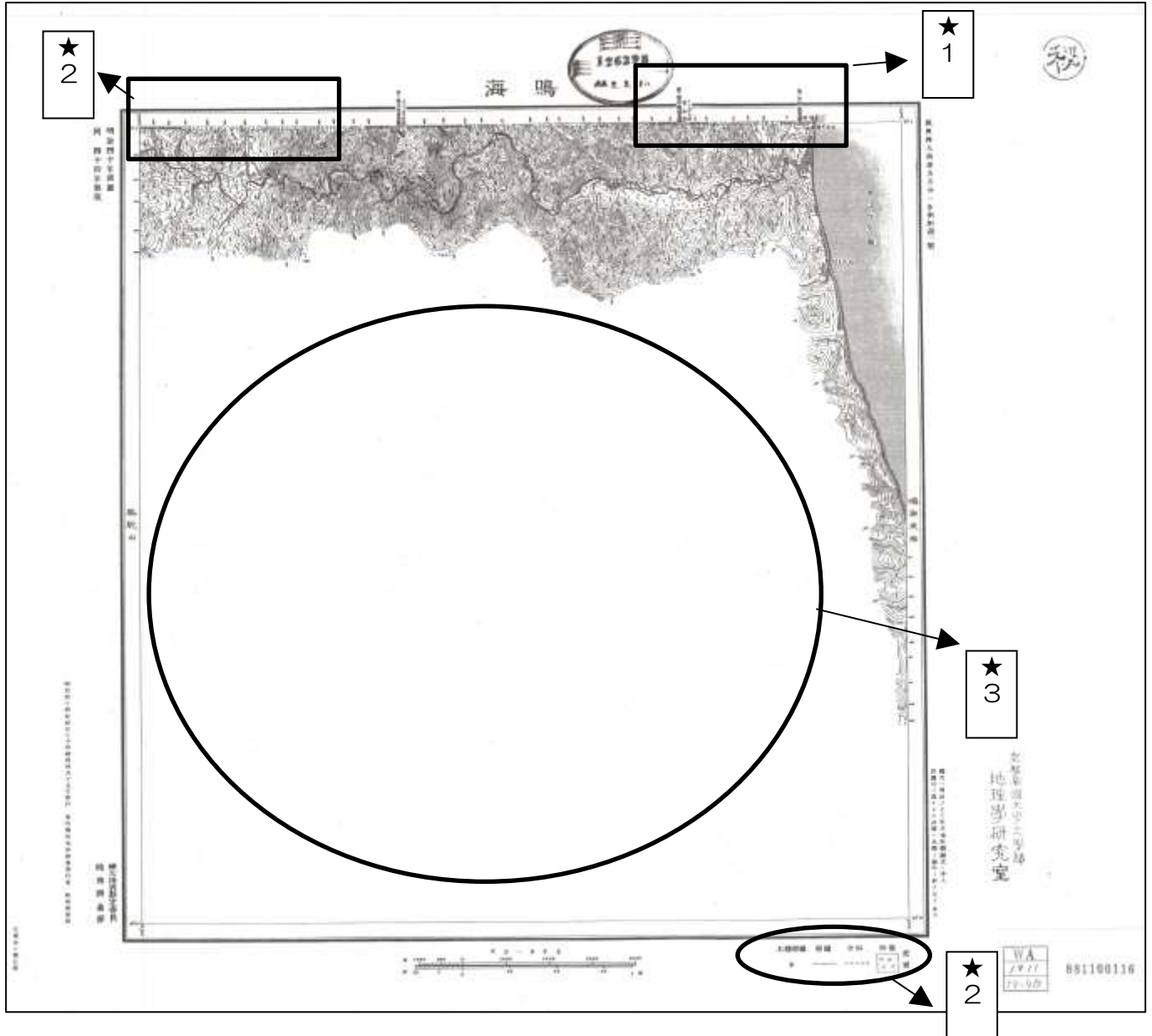


## 授業で使える当館所蔵地図

No. 72『仮製5万分の1地形図「鳴海」』（外邦図）  
 作成年：1907（明治40）年測図 1911（明治44）年作製  
 サイズ：50×50cm  
 作 者：陸地測量部



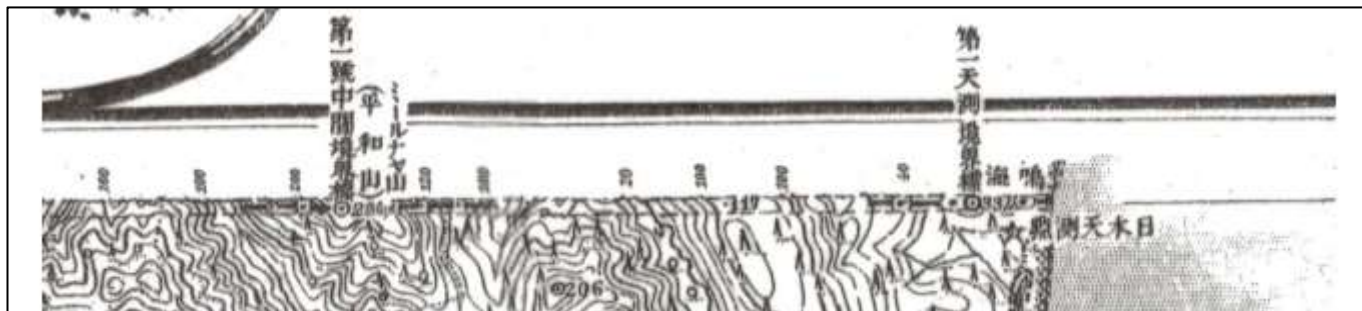
### 【解説】

明治37(1904)年2月に始まった日露戦争は、翌38(1905)年5月の日本海海戦における日本勝利の直後から和平交渉が進み、同年9月、日露講和条約（ポーツマス条約）が締結された。この結果、樺太（サハリン）の北緯50度以南が日本領土となった。翌年6月から国境画定のため、日露両国が協同して天文測量を行い、東のオホーツク海沿岸から西の間宮海峡まで全長約130kmの北緯50度線上に4基の天測境界標と17基の中間境界標等を設置し、国境線を定めた。島国の日本が陸地で国境を接し、国境標石（境界標）を設置したのは、歴史上この時だけである。この作業は、明治40(1907)年の9月に終了した。

その後、旧日本陸軍参謀本部陸地測量部は、樺太（サハリン）南部の5万分1地形図を作製した。上辺が国境である北緯50度線となっているものは、東から「鳴海」「駱駝山」「沖見山」「苔桃山」「幌見峠」「黒髪山」「逢見山」「安別」の8面である。

本図は、オホーツク海に面した一番東の図で「鳴海」である。

## ★1 国境部分

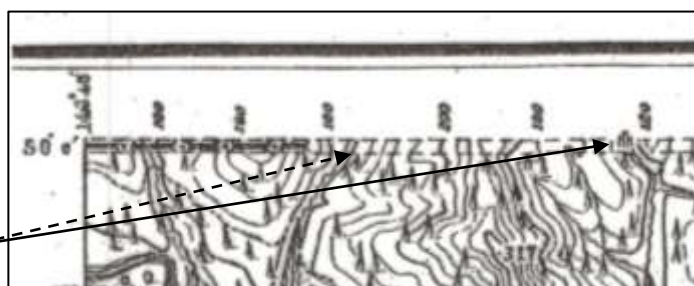
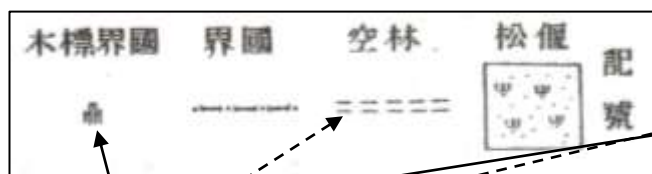


地形図の国境部分には、日本天測点※1とその近くに天測境界標※2、さらに中間境界標※2などが表示されている。

※1 日本天測点…日本が天文測量を行うために設けられた基準点。

※2 天測境界標・中間境界標…樺太（サハリン）では、4つの国境標石（天測境界標）のほかに、17個の中間標石（中間境界標）が設置された。第4天測境界標のレプリカが明治神宮外苑に、第2天測境界標は、根室市「歴史と自然の資料館」に展示してある。

## ★2 国境地図記号



国界標木…国境を示す自印。北緯 50 度線上に 19 の標木が設置されたといわれている。

林 空…国境線を明らかにするため、森林地帯では国境線に沿って幅 10m 範囲の樹木が伐採された。したがって、厳密に言えば僅かながら北緯 50 度以北にはみ出していることになる。日本天測点で北緯 50 度以北に表示されているものも他の地図にはある。

## ★3 空白部分

この時期、1 等三角測量に基礎を置く正式地形図が全国的に整備されつつあったが、樺太（サハリン）では応急的に仮製地形図が作製された。「鳴海」の地図を見ると、国境付近とオホーツク海沿岸以外はほとんど空白になっていることが分かる。取り敢えず国境を明示することを急いだためだと考えられる。他の 8 面も国境及び沿岸以外はほとんどが空白となっている。

### 【用語について】

・外邦図（がいほうず）

旧日本陸軍参謀本部陸地測量部がアジア・太平洋などを中心とする地域を対象に、戦略・戦術やその土地の統治（インフラ整備や徴税など）などを目的に作製した地図のこと。岐阜県図書館は、大学等の寄贈により、14,000 点ほどの外邦図を所蔵している。

### 【利用の例】

○ポーツマス条約の内容の確認に利用することができる。

→歴史的分野の「日清・日露戦争と近代産業」で、「ポーツマス条約」の内容である、北緯 50 度線より南が日本の領土となったことの確認をすることができる。

○日本の近代化の様子を同うのに利用することができる。

→歴史的分野の「開国と近代日本の歩み」において、欧米に追い付くために、近代的な国際関係になろう（国境線をはっきりとさせること）とする日本の姿勢を同うることができる。